

# 「時を超える触れ合い」 —クィア・テンポラリティ論の聖書学への適用

安 田 真由子\*

## 抄 録

中世研究者であるキャロリン・ディンショウは、中世における性を考えることが、現在における中世観のみならず、現在と過去との関係、ひいてはいまここに生きるわたしたちと、いまここではない時空間に生きる・生きていた他者たちとの関係を、そして関係を結ばんとするわたし自身をクィアに捉え直すことに繋がると主張する。本稿では、彼女の提唱する「時を超える触れ合い」という概念、あるいは感覚を紹介し、それが米国の聖書学にどのような影響を与えてきたかを振り返る。

**Keywords:** クィア・テンポラリティ、クィア批評、聖書学、パウロ研究

## 1. はじめに

クィアな人々、そのコミュニティ、文化、そして生き方そのものには、独自の時がある<sup>1</sup>。クィアな人々は、自分を取りまく社会で当たり前とされる時の流れとは異なる時を生き、また時間や歴史、過去や未来を異なるしかたで理解している。いや、関わっていると言う方が適切だろうか。時

間とクィアに関わって生きる人は、その関わりの中から、社会の中で時間がいかにシスヘテロ規範<sup>2</sup>によって構築され、枠づけられ、律されているか、また逆にシスヘテロ規範的な時間が社会を、そしてそこに生きる人間を構築し、枠づけ、律しているかを批判することができる。その批判は、クィアな人々を抑圧し、無視し、虐げることによって鈍感な社会に生きるあらゆる人が耳を傾けるに値する。なぜなら、人が他者とどのように関わり、共に生きていくかを問う上で、時の理解が一つの鍵を握るからだ。

\* Yasuda, Mayuko  
ルーテル学院大学

中世史家であるキャロリン・デインショウは、中世における性を考えることが、現在における中世観のみならず、現在と過去との関係、ひいてはいまここに生きるわたしたちと、いまここではない時空間に生きる・生きていた他者たちとの関係を、そして関係を結ばんとするわたし自身をクィアに捉え直すことに繋がることを主張する。本稿では、彼女の提唱する「時を超える触れ合い」という概念、あるいは感覚を紹介し、それが米国の聖書学にどのような影響を与えてきたかを振り返りたい。

## 2. クィア・テンポラリティ論の概観

時に関するクィアな視点や認識、批判は、2000年代に主に米国のクィア・スタディーズにおいてクィア・テンポラリティ (queer temporality) として理論化されていった<sup>3</sup>。時間は社会のほぼ全ての領域に関わるため、クィア・テンポラリティの議論も個人の人生や日常生活に関わるものから歴史理解や未来観まで多岐に渡る。クィア・テンポラリティの様々な議論や概念のうち、日本語にも翻訳され、日本語文献でもよく言及されているのはリー・エーデルマンの提唱した「再生産的未來主義」(reproductive futurism) である<sup>4</sup>。端的に言えばそれは、未來を子ども (the Child) = 慈しむべきもの、望ましいものとして捉える思想・態度であり、子どもを未來の象徴とするレトリックの中では、未來 (= 子ども、次世代) の再生産 (= 生殖) とその背後にある異性愛規範の絶対的特権が維持されていく。再生産的未來主義は、再生産に参与しないクィアな生及び「子どものために闘う」ことを選択しないクィアな位置取りという抵抗の可能性を奪うものである<sup>5</sup>。

クィア・テンポラリティの議論において再生産的未來主義への批判は大きなウェイトを占めるが、現在や過去を巡る議論も活発になされてきた。たとえば、個人の人生や日常生活がいかにシスヘテロ的な時間観に影響されているかは、一般的なライフコースが恋愛、結婚、出産、次世代に囲まれた老後といったビジョンを描き、シスヘテ

ロな人間を前提としていることに顕著である<sup>6</sup>。また、エイズ・パンデミック下の米国では、クィアな人々が多く仲間を失い、喪失感や失われた時間に取り憑かれつつ、先の見えない不安と慄きの最中で確かに存在する「いまここ」に集中していった<sup>7</sup>。「いま」を濃密に感じ、「いま」を増大させるような現在への集中も、クィア・テンポラリティの数多ある特色の一つである。

さらに、クィア・テンポラリティは、過去や歴史との関わり方にも大きな関心を向けてきた。というのも後述のとおり、「同性愛」や「性的指向」といった言葉・概念は近代の産物であり、「同性愛者」が一つのアイデンティティとなったのも近代以降のことであるが、それらの語・概念の登場以前と以後をどのような関わりにおいて理解すべきか、議論が分かれてきたからである。すなわち、「同性愛者」がカテゴリとして現れる以前の同性間の性行為や欲望と現代の同性愛は異なるしかたで構築されるので峻別されるべきであり、古代や中世の人間に「同性愛」「同性愛者」のカテゴリを用いるのは時代錯誤であるとの理解と、近代以前における同性間の性行為や欲望も現代的な同性愛と地続きのものとして扱うとの理解が対立してきた。過去における人間の性的な行為や欲望 (厳密には、それらを記録・表象する文学や芸術など) をどのように理解し、歴史として記述すべきかという問い -- それは、現在をどのように理解するか、ひいては言説を通して世界をどのようにかたちづくるかという問いと表裏一体である -- は、性の歴史のみならず、歴史理解・歴史記述全般にも波及する問題である。本稿は、クィア・テンポラリティ論のうち、キャロリン・デインショウの提唱する「時を超える触れ合い (a touch across time)」と、それを用いた聖書学の営みの一端を紹介するものであるが、その背後にあるのは、聖書学や神学において前提とされている時間理解をクィアし (揺るがし)、さらに、キリスト教がそのアイデンティティの根拠として用いてきたイエスに関するナラティブとクィアな関係性を模索するとはどういうことかを考えたいと

いう動機である。

### 3. 過去とのクィアな関わり

#### 3.1. 過去と現在の断絶という前提

日本において長いこと聖書学の主流となってきた歴史批評的方法論は、古代と現代の違いを強調する。古代の人々、文化、価値観、社会構造や経済機構、あらゆるものが現代のそれとは異なるため、現代的価値観をテキストに読み込むことで当時の著者や読者たちが理解したようにテキストを読むことが阻まれると危惧するからだ。飽くまでも客観的に、主観を交えずに歴史を再構築すべきであるというスタンスである。これに対して、フェミニスト批評やクィア批評は客観性そのものがマジョリティの主観にすぎないことを指摘し、むしろ（マイノリティの）主観を積極的に用いること、そうすることでマジョリティのバイアスを暴くことを研究上の倫理的責任と捉えてきた。主観を積極的に用いる中では、たとえば同性愛者や両性愛者がダビデとヨナタンやナオミとルツの関係に自らを重ねる（かれらと identify する）ような解釈が展開されてきた<sup>8</sup>。そこでは、古代の人々と現代のわれわれが連続的、同一的（identical）なものとして捉えられていく。このような解釈に対する歴史批評的な反応は往々にして否定的である。「あまりにも主観的であるために学問的でない」「古代の人間の性的欲望や行為のありかたは現代のそれとは異なる」「現代人のための解釈であって古代社会を正しく理解するための解釈実践ではない」といった具合である。

古代と現代の関係において違いや断絶を強調する傾向と、同一性や連続性を強調する傾向の対立は、聖書学に特殊なものではない。それは、現代の人間が過去や歴史をどう捉えるか、またどのように関わるかという問いに根ざしており、歴史を扱う領域において広く見られるものである。性の歴史においても同様だ。

「かつて男色家は性懲りもない異端者であった。今や同性愛者は一つの種族なのである」（フーコー、1986）とはミシェル・フーコーの有名な

一説であるが、これは一九世紀において同性愛者が一つのアイデンティティ（「種族」）として立ち現れたこと、すなわちそれ以前には同性間の性行為は単なる行為であって、それを行う人を特殊な種類の人間としてカテゴライズするようなものではなかったことを指摘する。デイヴィッド・ハルプリンも、同性愛は一九世紀に発明されたものであるとして類似した主張をしている<sup>9</sup>。このような見解において、時代は「同性愛」「同性愛者」の発明以前と以後とに峻別される<sup>10</sup>。歴史は断絶され、一九世紀以降の同性愛者と一九世紀以前の「同性愛的な」人々も分断される。また、中世や古代において同性に性的な欲望を抱いた人々や同性間で性行為を行った人々について、現代的な同性愛者理解のもとで考えるのはナイーブな時代錯誤ということになる。

しかし、このような時代区分のしかた、時代を区分することそのものについて、そして現代の学者による時代区分に則って「時代錯誤」性を判断することに対して、クィア・テンポラリティの研究者、理論家たちからは異議が唱えられている<sup>11</sup>。問うべきは、時代がどの時点でどのように分けられるかではなく、過去と現在を区分する行為に潜む、現在の固定化、安定化、特権化などのさまざまな欲、動機だからだ<sup>12</sup>。よって今日では、同性愛者をはじめとするクィアな人々の歩み（歴史）、あるいは歴史上のクィアな人々を研究する上で、セクシュアリティがアイデンティティ・カテゴリと認識されるようになる時代以前の人々の、多様な性的行為や性的欲望をどのように捉えるか、あるいはそのような人々とどのように関わるかが問われ、研究されている。

分かりやすい時代区分と、区分のもたらす断絶が避けられるべきであるのは当然ながら、過去と現在の連続性・同一性の強調もまた、他者の理解不可能性を軽視して自己投影しているにすぎない恐れがある。また、過去の人物に自分を重ね合わせていくような過程では、自己も他者も揺るぎない輪郭を持ったものとして固定化されていくこととなる。そこでは、定義やカテゴライズ、固定化

を拒絶するような、曖昧で揺らぎがある不完全な在り方が見落とされていく。以下に見るように、人間の持つ不完全さや不安定さは関係性を考える上で重要であり、それらも考慮できるような現在と過去の関係の捉え方、また現在と過去や自己と他者といった二項対立をも揺るがすアプローチが必要である。そしてこれは、聖書学におけるテキストと現代読者の関係を考える上でも重要な問いとアプローチである。

### 3. 2. 時を超えて触れ合うこと

「時を超える触れ合い」によって過去と現在のクイアな関係づくりを提唱するのは中世文学・文化研究者のキャロリン・ディンショウである。クイアな関係とは過去と現在の関係における二項対立を退けるような関係、すなわち過去における同性間の性愛関係を現在の同性愛と全くの別物として扱うこととも、それらを完全に同一のものとして扱うことともズレるようなしかたで、部分的に、クイアな（周縁的かつ逸脱的な）ポジションを手がかりに結ばれる関係である。「クイアたちは過去の人物たちと新たな関係、新たな同一化、新たなコミュニティをつくることができる。かれらとわたしたちは似ていなくとも、周縁性を共有すること、クイアな立ち位置によって部分的に繋がることができる」(Dinshaw, 1999)<sup>13</sup>。

ディンショウは、1999年出版の *Getting Medieval: Sexualities and Communities, Pre- and Postmodern* において、中世における性を考えることが大きな広がりを持つていて示している。それは、歴史を書く(=つくる)際に働くイデオロギーとその影響、現在と過去、自己と他者などの対立の関係性、その対立性のもとに築かれる性的アイデンティティやコミュニティ、また対立性によらずに性に関わる自己理解やコミュニティを新たに構築すること、そしてこれら全ての相互関係について考えることと不可分であるからだ。ここで用いられている性(sex)という語には「性的行為、性的欲望、性的アイデンティティ、性的な主体、セクシュアリティ」(Dinshaw, 1999)

が含まれており、従って性とは「異種混成的で多重的、そして根本的に不確定」(Dinshaw, 1999)なものである。

たとえば、中世のテキストは同性間の性行為が自然的に発生するものという見解と、誰かから教えられることのみ同性間性行為について知りうるという見解の両方を反映している<sup>14</sup>。John Mirk の *Instructions for Parish Priests* (以下「指南書」)などのキリスト教文書は、「自然に反する」性行為のうち同性間の性行為が「言葉にするのも憚られる」ほどの禁忌であると示唆する。同性間の性行為を、口にできない罪、書くのもおぞましい禁忌といった婉曲表現で表すのは、「同性間の性行為」という文言を見聞きすることで人々がそれについて知り、興味を持つことを防ぐためである。司祭は、同性間性行為を禁じるにあたって、その語を口にするだけで人々を罪へと誘う危険があるというわけだ。しかし同時に「指南書」は7歳以上の子供たちがベッドを共にすることも禁じており、ディンショウはこの指示を男女間の婚前の性行為を防ぐのみならず、同性間の性行為をも懸念したものであると解釈する。というのも、「指南書」と同時期に書かれたジョン・ガワー(イングランドの詩人)の長編詩「恋する男の告解」には、少女たちどうして結婚しベッドを共にする話が登場するが、彼女たちは誰に教えられることもなく自然と性的関心を育む。子供たちにとって同性間の性的接触は、司祭から聞かされるまでもなく発見しうるものであり、また魅力的でさえあり、だからこそ子供たちはそのような「変態的」な欲望から守られなければならない。それゆえに「指南書」は子供たちがベッドを共有することを禁じるのである。

同性愛は先天的か後天的かという論争(nature vs. nurture problem)は現代にも共通するものであるが、性において何が自然であり何が不自然であるかを巡る矛盾した言説は、性が「異種混成的で多重的、そして根本的に不確定」であることを示唆する。ディンショウは、この不確定性、掴みきれなさこそが、歴史を紐解き、理解するた

め、また自己やコミュニティを築くための条件であると語<sup>15</sup>。つまり、性が不確定であればこそ、過去における逸脱的な性を完全に他者化し断絶するのでもなく、また過去における性的逸脱と現在のそれとを完全に同一化するのでもなく、過去と現在が部分的に繋がるのが可能になるわけである。

繋がりが部分的であることを理解するためには、二つのことを確認しなければならない。一つは歴史や過去を知ることの困難、もう一つは知ろうとする自己もまた不完全・部分的であるという点だ。歴史学において、性のみならず文化的現象が確定し難いものであることは、とりわけ言語論的転回以降よく見られる態度であるとディンショウは論じる<sup>16</sup>。事物と言語（記号）がイコールでも一対一対応でもない以上、事物そのものも歴史そのものも知ることはできない。知りうるのは、言説、表象されたもの、それに対する歴史家による意味づけのみである。また意味生成において歴史家の用いるアプローチも視点も知識もまた表象システムに依存しているとディンショウは指摘する<sup>17</sup>。言語化された出来事、歴史に関して表象の問題がつかまとうならば、言語化され難い歴史においてはなおのことである。たとえば上述の中世における同性間性行為のように「口にすることも憚られる」禁忌として扱われるもの、すなわち言葉にできなかったこと、してこなかったことを、わたしたちは一体どのように「知る」ことができるだろうか。クィアな人々に関する歴史、とりわけ女性やノンバイナリなどに関する歴史資料はあまり残されていない。僅かな資料から意味生成を試みるとき、それが現在にとって都合のいいもの、現在の過去への投影となる傾向は強まるだろう。しかしディンショウは「認識論に関わることがらに取り組んできた歴史家たちは「回復しうる過去」という考えを完全に捨てたわけではない」(Dinshaw, 1999)<sup>18</sup>とも述べている。

「クィアな歴史は、何らかの回復可能な過去に対する欲望を否定せず、このような知の生

産についての説明を提供することを試みるが、それは「現実」について誠実に説明することをも求めるものだ。わたしがここで展開するクィアな歴史がこれを行うのは、ハラウェイが「部分的つながり」と呼ぶものによってである」(Dinshaw, 1999)

この「部分的なつながり」を補足すべく、ディンショウはこの直後にハラウェイ自身の次の言葉を引用する。

「知るという過程の途上にある抜け目ない自己は、あらゆる外見からして部分的であり、決して完成しておらず、なおかつ全体的であり、ただそこに存在しており、オリジナルである—そして、常に構築途上であり、不完全に縫い合わされていて、であればこそ、他者であることをことらさに主張することもなく、他者と接合したり、ともに見たりすることが可能なのである。(ハラウェイ、2017)

すなわち、過去を知ろうとするならば、過去の事実を復元することの必要性も、それを必要とし要求する欲望も、そしてその不可能性をも自覚する必要がある。同時に、過去の復元の試みが言説による意味生成であることを自覚する際、その意味生成を行う「わたし」が不完全であることも自覚されなければならない。不完全であればこそ、他者と自己を同一化することなく他者と結びつくことができるからだ。

「部分的繋がり」は、現在と過去を考える上で二項対立的な枠組み—すなわち現在と過去の完全な同一化あるいは他者化による断絶—を乗り越えるものである。同一化と他者化は相互排他的なものではなく、むしろ不可分なものであることは、非同一体化 (disidentification) や私物化 (appropriation) といったクィア理論概念によって明らかにされてきた。「クィア理論が強調してきたこれらの用語はすべて、模倣そのもののなかにある異質性、同一化が決して完璧には行われな

いという側面を指し示している。そして、そのような関わりへと駆り立てる欲望、時さえも超える関係性を促す情動を示唆している」(Dinshaw, 1999)。何かの模倣、模倣によってそれと同一化すること、「それになる」ことは、常に完璧には行われない。たとえばこれはジェンダー理論において重視されてきたことだ。「女らしさ」「女であること」が何を意味するかは社会によって決められており、自分を女であると自覚する人は、予め構築された「女性性」を模倣することで女となる。しかしこのとき、模倣のもととなる「女性性」の起源・オリジナルは特定され得ず、女はオリジナルなきコピーとして女性性を模倣し、コピーが繰り返される中で「女性性」はズレていく。つまり模倣の中にすでにズレ、異質なものが入り込んでいるのである<sup>19</sup>。ここで重要なのは、ディンショウが模倣、同一化の欲求、そこに内包される異質性を自己と他者の関わりにおける情動的な関係の構築と結び付けていることである。ディンショウの理解によれば、クィアな歴史は部分的な繋がり、「情動的関係」によってつくられている<sup>20</sup>。すなわち、いま性的規範から弾き出されるわたしが、いまを生きる同じような人々との繋がりを求め、また過去において性的に逸脱していた人々やコミュニティ、その生、それらを表象するテキストとも繋がりたいと欲し、手を伸ばす。そのような「クィアな歴史的衝動」によって、クィアたちは過去と触れ合い、情緒豊かな関係を結ぶのである。

## 4. 聖書学への影響

### 4. 1. 「クィアに『歴史をつくる』」—ジョセフ・マーシャルの論考

クィア批評を用いるパウロ学者のジョセフ・マーシャルは、2011年に出版された論文<sup>21</sup>の中で「時を超える触れ合い」概念を用いつつ、聖書学において歴史をクィアに捉え直すこと、とりわけローマの信徒への手紙においてパウロが非難する人々（「かれら」ロマ1:19ほか）と部分的な繋がりを築くことを試みている。

ローマの信徒への手紙1章26-27節は、（とりわけ欧米の）教会において長いこと同性愛者をはじめとする性的マイノリティを断罪するべく用いられてきた。この箇所でパウロは特定の人々を「私たちとは異なるかれら」として区別した上で、性的に逸脱した者として非難する。多くのキリスト者はこの「わたしたち」と「かれら」の境界線が無批判的に引き継いで自らをパウロと同一化し、「かれら」とは距離を取ってきた。この距離とは、時代的な隔たりのみならず「性的モラル」的な距離でもある。また、パウロの非難する「かれら」と今日の性的マイノリティが同一化されることで、(古代と現代両方の)「かれら」が断罪されるべき対象とされたのである。このような読解においては、テキストと読者の間で時代的な断絶と同一化の両方が錯綜していると言えるだろう。そのような攻撃に対し、クィアなキリスト者たちは自らの身を守るべく古代と現代の違いを強調し、古代のテキストを現代にそのまま適用することはできないと論じてきた<sup>22</sup>。

このような議論の運びは、クィアな人々のステイグマを取り除く上で一定の効果があるものの、マーシャルはクィアに歴史・過去を捉え直す方向性を模索する。というのも、クィア・テンポラリティ論が指摘してきたとおり現代と過去との繋がりは部分的であり、完全な断絶も同一化も実際のところは不可能であるからだ。ローマ書において性的に逸脱した者として周縁化された「かれら」と、今日のクィアたちは周縁化というポジションにおいて部分的な繋がりを見出すことができるとマーシャルは論じる。彼の論文では、その繋がりが過去と現在の関係、歴史の作られ方に対する私たちの見方を変えることが期待され、さらにそのような変化によって歴史をクィアに作る事が目論まれている。

マーシャルによるローマ書理解の概略は以下のとおりである。ローマ書1章でパウロは「私たち」と「かれら」の間に境界線を引き、「かれら」は神の怒り、死に値する行為を行っていると批判する。「神について知りうることから」は明白で、

かれらにも啓示されたため (1:19)、かれらは神を知っている。それにも関わらず、かれらの知は愚かなものとなり、誤用され、正しくない行いへといたる (1:21 - 32)。マーシャルは、このようなパウロの記述には一貫性がみられないと論じる。「かれら」が神を知りつつもその理解や議論が鈍いのなら、それは神の知が「明らか」であることと矛盾するからだ<sup>23</sup>。「人々が去って行ったのなら、明快であるはずの啓示のプロセスに問題があったということだろう。ある人たちはこの[パウロの]バージョンの神の知と同一化せず、それを望まず、またそれと繋がりを持っていない(あるいは少なくともかれらのやり方はパウロにとってはあまりにも部分的なのだ)」<sup>24</sup>。ここで重要なのは、「このバージョンの神の知」である。マーシャルは、神について知るにも多様な方法があったこと、またそれをパウロが認めていなかったことを指摘し、「かれら」はパウロ流の「正しい信仰のありかた」とは異なるしかたで神を知り、その知に基づいて生きていたと分析する。

1章18、32節においては神が「かれら」に怒り「かれら」を死に定めると語られているが、この神像はその激しさ、荒々しさ、欲求の制御不可能性において異邦的なもののイメージを彷彿とさせると指摘される。ここでは、「正しい」信仰のあり方と異邦的なものを峻別しようとするパウロの線引きが、線引きの論拠となりまた線引きを強化する「激しく怒る神」のイメージにおいて、図らずも揺るがされてしまっているわけである。また、この神の怒りは、性的逸脱や不適切な行いによって特徴づけられる「かれら」に向けられており、この「かれら」は「わたしたち」の側には入れない存在として厳しく咎められている。「わたしたち」と「かれら」の境界線は確固たるものようである。しかしマーシャルは、この境界線を揺るがすものがパウロ自身の語りの中にすでに存在していると分析する。というのも、パウロは「あなたがた」(2:1)に向けて「かれら」のようにならないよう警告するが、それは手紙の受取人たちが、手紙で展開される様々な議論、知のあり方

や信仰の実践方法と同一化も非同一化もしうることを意味するからだ。「わたしたち」と「かれら」は同一化されないものとして両者の間には侵し得ない境界線が引かれているにも関わらず、「わたしたち」の一員であるはずの「あなたがた」が「かれら」と同一化し境界線が揺らぐことへの不安も述べられている。マーシャルは、このような同一化と非同一化の可能性、境界線の確固さと不安定さの併存に、「時を超えた触れ合い」の可能性を見出している。

このような矛盾的なものの共存から見えてくるのは、ローマの共同体に属する人々の多様さである。マーシャルは、ローマ書16章であげられる人々の大多数が性的マイノリティ<sup>25</sup>であった可能性や、互いにコミットしている女性ペアがいたという議論を紹介し<sup>26</sup>、手紙の受取人であるローマの共同体には多様な人々が混在していたと主張する。マーシャル曰く、だからこそパウロは「私たち」と非規範的な「かれら」を区別することで、ローマの共同体を当時の規範に則ったものとして描き、あるいはそうであるよう強いているのである。

パウロの「かれら」批判において矛盾・対立するものの併存が見られるように、「わたしたち」と「かれら」、現代と過去の境界線は消し去ることができずとも全く不可侵なものであるわけではない。部分的な繋がりがある。その部分的繋がりによって時を超えて触れ合うことで、歴史を捉え直し、想像し直す過程で、聖書テキストの描く共同体もまたそれを読む共同体もつくりかえられていく。「繋がり」が偶発的(contingent)であっても、そのような行為は同時進行する歴史という異なる観点において、ある種の非同一的な共存が存在する[偶発的なできごとや]集合体(contingent)を、つまり時間性の乱雑な共-存在を創り出しうる」<sup>27</sup>。

#### 4. 2. そのほかの例

デインショウの「時を超えた触れ合い」は、マーシャルの論文以外にもクィア・テンポラリ

ティ論を用いる聖書学研究においてたびたび用いられている。全てを詳細に検討するには紙幅が足りないため、ここでは二つの文献に絞って紹介するにとどめる<sup>28</sup>。

新約学へのポストモダンのアプローチの導入を牽引してきたスティーブン・D・ムーアは、*Gospel Jesuses and Other Nonhumans* の第5章 “The Inhuman Acts of the Holy Ghost”<sup>29</sup> でクィア・テンポラリティ論を用いたルカ読解を展開している。そこでは聖霊 (holy ghost) が、イエス亡き後を生きる人々に、また遡及的に生前のイエス (の物語) に取り憑く亡霊 (ghost) として捉えられる<sup>30</sup>。この亡霊的聖霊は、デインショウの語る「時を超えた触れ合い」を行いうるものである。時を超え、過去・現在・未来の境界線を揺さぶり、人々と触れ合っていくのである。

[[ルカ] 福音書と聖霊言行録において時間をクィアする聖霊の行為は、文書を横断する表向きは順番に続く四つタイムライン—ローマの時、メシアの時、教会の時、そして終末の時—をかき混ぜ／混乱させ／ごちゃごちゃにし、ルカの二巻本の怪談 (ghost story) を、デインショウが非共時性と呼んだものの超大作例とした。『今という一瞬のうちに衝突する異なる時間の枠組み、あるいは時のシステム』(Moore, 2017)<sup>31</sup>

2020年には、米国の聖書学ジャーナル *Biblical Interpretation* がクィア・テンポラリティ特集を組み、イントロダクションや各論考への応答を含め七つの論文を取めている。そのうちのいくつかはデインショウの研究、とりわけ「時を超えた触れ合い」概念に言及している。特筆すべきは、ムーアとデニス・キンバー・ブエルの共著によるイントロダクションである<sup>32</sup>。そこでは、時を超える触れ合いがキリスト教において默想的に聖書を読み、聖徒たちと聖餐にあずかり、そして十字架で殺された男に (まるで亡霊に憑かれるように) 思いを馳せる中で常に行われてきたことであ

ると述べられる。対照的に、聖書学の歴史批評的方法論では過去と現在の断絶が強調され、時を超えた触れ合いが見られないと指摘されるが、これは本稿でも確認したとおりである<sup>33</sup>。加えて、同特集に収められているピーター・N・マクレランの論考はゲラサの悪霊憑きの物語 (マコ 5:1 - 20) を取り上げ、ゲラサとワシントン DC の売春禁止区域を触れ合わせている<sup>34</sup>。ゲラサにおいては悪霊憑きが、DC の晩春禁止区域においては有色のトランス女性たちが抑圧され排除されるが、かれらのつくるクィアな部分的繋がりを読み解く中から現代の死政治 (necropolitics) 批判が展開されていく。

現在と過去の単純な対立も統合も拒むクィア・テンポラリティは、その揺らぎにおいて部分的な繋がりを拓けばこそ、現代の読者と古代のテキストの新たな関わりを可能にする。クィア・テンポラリティを用いる英語圏の聖書学においては、現代的課題のために古代テキストを読むことと、古代テキストの理解のために現代的課題の視点を自覚的に用いることの両方がより真剣に、より熱心に、またよりクィアに試みられてきた。今後、より広く深く展開されていくことが期待される。

## 5. おわりに

クィアに時間を考えると、自己と他者を問い直す営みである。以上に見てきたように、学問において時間的隔たりを強調することが中世や古代といった過去を他者化し、そのうちにあったはずの多種多様さを均質化し、「それとは異なる自己」を確立するための足場として固定化する。同様にクィアな人、クィアさもまた他者化され、均質化され、固定化される。それは、自己もまたそのうちにあるはずの矛盾や揺らぎを否定し、あるべき自己像と衝突する諸々を捨象することで確立されることを意味している。時代的、物理的隔たりのある他者が構築されるプロセスを問ううちに、「わたし」と「かれら」の境界線がぼやけ、引き直され、それぞれの構築性も問われていく。このように、時をクィアに捉えるならば現在と過去とは交



わり得ない「こちら」と「あちら」ではなく、時を超えて触れ合うことのできるものとなる。

遙かかなたにいたはずの「クィアな」人々、今は姿も見えず声も聞こえない人々、あるいは声を潜め姿を隠してまるでいないふりをして生きていたかもしれない人々、あるいはかつて大声で自分はここにいると主張しながらも存在を抹消されてきた人々。かれらが周縁から呼びかける声なき声に、周縁化された私の悲しみも、周縁で繋がり合うことの喜びも呼び覚まされるとき、不安定で不完全で掴みきれない、けれど親密な交わりがひらかれていく。その触れ合いの中から、あるべき自己の確立の過程で捨象されたものや他者として断絶されてきた者／モノたちを見出し、拾いあげるとき、それらを自己のうちに回復することも再び捨象することもできないことが自覚されるだろう—多くの場合、痛みを伴って。それでもその触れ合いの中で言葉を聞き、また自ら言葉を紡ぐのは、それが、自己がかれらとともに必要とあらば壊され、新たな「わたしたち」として創造しなおされていくための頼りなくも必要な営みだからだ。時を超えて伸ばされる手や足や眼差しがもたらすものが何であるか—痛みか、喜びか、あるいは想像をさえ及ばないような驚きか—それは触れてみるまで分からないものだ。クィア・テンポラリティ論は、時を超えて伸ばされる手を指し示すことで、聖書読解がより創造的／想像的なものへとひらかれるよう招いている。聖書読者はその手を取る準備ができていだろうか。いや、用意などできていなくてもすでにその手が私たちに触れているのなら、その接触にどのように応えることができるだろうか。

本稿は、日本キリスト教協議会アメリカ合衆国長老教会奨学金を受けて書かれたものである。

#### 後注

1) Judith Halberstam (2003) “What’s That Smell?: Queer Temporalities and Subcultural Lives”

<https://sfonline.barnard.edu/ps/printjha.htm> (accessed September 30th, 2023) を参照。

- 2) すべての人がシスジェンダーでヘテロセクシュアルであることを前提とした法、社会、慣習などの原則と体系を指す。
- 3) 「クィアな時間性」「クィア時間論」とも訳される。主な理論家たちとその主要な著作は以下のとおり。Carolyn Dinshaw (1999) Getting Medieval: Sexualities and Communities, Pre- and Postmodern, Duke University Press; Lee Edelman (2004) No Future: Queer Theory and the Death Drive, Duke University Press; Carla Freccero (2006) Queer/Early/Modern, Duke University Press; Elizabeth Freeman (2010) Time Binds: Queer Temporalities, Queer Histories, Duke University Press; Judith Halberstam (2015) In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives, New York University Press; Madhavi Menon (2008) Unhistorical Shakespeare: Queer Theory in Shakespearean Literature and Film, Palgrave Macmillan; Jose Esteban Munoz (2009) Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity, New York University Press.
- 4) エーデルマンによる再生産的未來主義批判がまとめられているのは No Future であるが、その第一章の土台となった論文は邦訳出版されている。リー・エーデルマン (2019)「未来は子ども騙し: クィア理論、非同一化、そして死の欲動」藤高和輝訳『思想』(1141)、岩波書店、107 – 126。エーデルマンの議論に関しては日本語で読める文献が存在するため、本稿ではここで触れるにとどめる。羽生有希 (2016)「クィア・ネガティビティの不可能な肯定: 固有/適切でない主体の脱構築的批評」『ジェンダー & セクシュアリティ: 国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル』(11)、国際基督教大学ジェンダー研究センター、149 – 174、井芹真紀子 (2023)「フレキシブルな身体: クィア・ネガティビティと強制的な健全性」菊地夏野ほか編『クィア・スタディーズを開く 3: 健康/病、障害、身体』晃洋書房、200 – 226 などを参照のこと。
- 5) エーデルマンは No Future において再生産的未來主義の批判とともに、再生産的未來主義に基づく/を再生産する社会・政治・法などに対するラディカルな否定 = クィア・ネガティビティを提案している。『未来なし』において、クィアさとは、再生産的未來主義がクィアなものを否定しつつもその歯車はクィアさの否定によってのみ回っていることを暴くものである。エーデルマンは、クィアさの否定によって機能する社会・政治への抵抗として今ある選択肢を

- すべて否定するようなラディカルな否定性をクィア・ネガティビティとして評価し、クィアな人々にクィア・ネガティビティを生きるよう促している。クィア・ネガティビティに焦点を当てた日本語での研究として、羽生の前掲論文を参照。
- 6) Halberstam, In *Queer Time and Space*, 5 を参照。
  - 7) ハルバースタムは、亡霊的なクィア時間の発生をエイズ・パンデミック下の米国という文脈に見出している。Halberstam, In *Queer Time and Space*, 2.
  - 8) たとえば、Nancy L. Wilson (2013) *Outing the Bible: Queer Folks, God, Jesus, and the Christian Scriptures*, LifeJourney Press, 113-121 など。
  - 9) デイヴィッド・M・ハルプリン(1995)『同性愛の百年間：ギリシアの愛について』石塚浩司訳、法政大学出版局。「同性愛」と「同性愛者」の発明は厳密には異なるが、ここでは詳細は割愛する。
  - 10) 「同性愛の発明」以前と以後とを峻別する立場に立った聖書学的研究として、小林昭博(2021)『同性愛と新約聖書——古代地中海世界の性文化と性の権力構造』風塵社。とくに第3章「用語と概念」において小林は「時代錯誤」的に同性愛概念を用いた聖書学の先行研究をまとめている。
  - 11) クィア・テンポラリティ論の研究者のうち、とりわけ Dinshaw, Freccero, Menon は歴史区分や歴史記述に関する議論を深めている。
  - 12) たとえば Menon, *Unhistorical Shakespeare* より “The Argument: Unhistoricism, or Homohistory,” 1-25 参照。
  - 13) 私訳。以下、ディンショウの引用はすべて私訳による。
  - 14) 以下、Dinshaw, *Getting Medieval*, 3-11 の要約である。
  - 15) Ibid., 1.
  - 16) Ibid., 13-14.
  - 17) Ibid., 14.
  - 18) ここで用いられているのは Gabrielle M. Spiegel (1999) *The Past as Text: The Theory and Practice of Medieval Historiography*, Johns Hopkins University Press の議論である。
  - 19) ジェンダーの模倣、反復とそこに潜むズレについてはジュディス・バトラー(1999)竹村和子訳『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社参照。
  - 20) Dinshaw, *Getting Medieval*, 12.
  - 21) Joseph A. Marchal, “‘Making History’ Queerly: Touches across Time through a Biblical Behind,” *Biblical Interpretation* 19 (4), 373-95.
  - 22) Mona West (1999) “Reading the Bible as Queer Americans: Social Location and the Hebrew Scriptures,” *Theology & Sexuality* 5 (10), 32 以下で説明される defensive stance がこのようなアプローチに該当する。また、前掲の小林『同性愛と新約聖書』も同様の流れを汲んでいる。
  - 23) Marchal, “‘Making History,’” 388.
  - 24) Ibid., 389.
  - 25) 同性同士でパートナー関係にある者や同性同士で同じ家に暮らしている者、独身者のみならず、移民や奴隷も含まれる。
  - 26) Thomas Hanks, “Romans,” in *The Queer Bible Commentary* (2006) ed. Deryn Guest, Robert E. Goss, and Mona West, SCM Press, 582-605; Mary Rose D’Angelo (1990) “Women Partners in the New Testament,” *Journal of Feminist Studies in Religion* 6, 65-86.
  - 27) Marchal, “‘Making History,’” 394.
  - 28) 2018 年にはクィア・テンポラリティ論を用いた神学論集が出版され、前出のマーシャルや後出のムーアなど寄稿者の中にはディンショウの研究を参照している者もいる。Kent L. Brintall, Joseph A. Marchal, and Stephen D. Moore, eds. (2018) *Sexual Disorientations: Queer Temporalities, Affects, Theologies* Fordham Univ Press. ただしこの論集は神学論集であって聖書学論集ではないためここに注記するとどめる。
  - 29) Stephen D. Moore (2017) “The Inhuman Acts of the Holy Ghost,” in *Gospel Jesuses and Other Nonhumans: Biblical Criticism Post-Poststructuralism*, SBL Press, 85-106.
  - 30) 亡霊や憑依は時を超えて触れ合う上でも重要なテーマであるため、クィア・テンポラリティ論はジャック・デリダに端を発する憑在論 (hauntology) と密接に繋がっている。安田真由子(2018)「舞い戻る死者、不正の告発」『福音と世界』73(4)、28 - 33、(2019)「時間をクィアすること」『福音と世界』74(1)、41-43 参照。
  - 31) 私訳。最後の一文は Carolyn Dinshaw (2012) *How Soon Is Now?: Medieval Texts, Amateur Readers, and the Queerness of Time*, Duke University Press, 5 の引用。
  - 32) Stephen D. Moore and Denise Kimber Buell (2020) “Introduction: Queerness, Time, and Biblical Interpretation,” *Biblical Interpretation* 28 (4), 385-397.
  - 33) Ibid., 390.
  - 34) Peter N. McLellan (2020) “Queer Necropolitics in the Decapolis: Here and There, Now and Then,” *Biblical Interpretation* 28 (4), 428-50.

文献表

- Brintnall, Kent L., Joseph A. Marchal, and Stephen D. Moore (2018) Sexual Disorientations: Queer Temporalities, Affects, Theologies, Fordham Univ Press.
- Butler, Judith (1990) Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity, Routledge.  
(=1999、竹村和子訳『ジェンダー・トラブルーフェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)
- D' Angelo, Mary Rose (1990) "Women Partners in the New Testament." Journal of Feminist Studies in Religion 6, 65-86.
- Dinshaw, Carolyn (1999) Getting Medieval: Sexualities and Communities, Pre- and Postmodern, Duke University Press.
- (2012) How Soon Is Now?: Medieval Texts, Amateur Readers, and the Queerness of Time. Duke University Press.
- Edelman, Lee (1998) "The Future Is Kid Stuff: Queer Theory, Disidentification, and the Death Drive." Narrative, 6 (1), 18-30. (=2019、藤高和輝訳「未来は子ども騙し:クィア理論、非同一化、そして死の欲動」『思想』(1141)、岩波書店、107 - 126)
- (2004) No Future: Queer Theory and the Death Drive, Duke University Press.
- Freccero, Carla (2006) Queer/Early/Modern. Durham, Duke University Press.
- Freeman, Elizabeth (2010) Time Binds: Queer Temporalities, Queer Histories, Duke University Press.
- Halberstam, Judith (2003) "What's That Smell?: Queer Temporalities and Subcultural Lives" <https://sfoonline.barnard.edu/ps/printjha.htm>
- (2005) In a Queer Time and Place: Transgender Bodies, Subcultural Lives, New York University Press.
- Halperin, David M. (1990) One Hundred Years of Homosexuality: And Other Essays on Greek Love, Psychology Press. (=1995、石塚浩司訳『同性愛の百年間:ギリシアの愛について』法政大学出版局)
- Hanks, Thomas. "Romans." In The Queer Bible Commentary, edited by Deryn Guest, Robert E. Goss, and Mona West, 582-605. SCM Press, 2006.
- 羽生有希 (2016)「クィア・ネガティヴィティの不可能な肯定:固有/適切でない主体の脱構築的批評」『ジェンダー & セクシュアリティ:国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル』(11)、国際基督教大学ジェンダー研究センター、149 - 174
- 井芹真紀子 (2023)「フレキシブルな身体:クィア・ネガティヴィティと強制的な健常性」菊地夏野ほか編『クィア・スタディーズを開く 3:健康/病、障害、身体』晃洋書房、200 - 226
- 小林昭博 (2001)『同性愛と新約聖書—古代地中海世界の性文化と性の権力構造』風塵社
- Marchal, Joseph A. (2011) "'Making History" Queerly: Touches across Time through a Biblical Behind.'" Biblical Interpretation 19, (4), 373-95.
- McLellan, Peter N. (2020) "Queer Necropolitics in the Decapolis: Here and There, Now and Then." Biblical Interpretation 28 (4), 428-50.
- Menon, Madhavi (2008) Unhistorical Shakespeare: Queer Theory in Shakespearean Literature and Film, Palgrave Macmillan.
- Moore, Stephen D. (1994) Poststructural-IsM and the New Testament: Derrida and Foucault at the Foot of the Cross, Fortress Press.
- (2017) "The Inhuman Acts of the Holy Ghost," Gospel Jesuses and Other Nonhumans: Biblical Criticism Post-Poststructuralism, SBL Press, 85-106.
- Moore, Stephen D., and Denise Kimber Buell (2020) "Introduction: Queerness, Time, and Biblical Interpretation," Biblical Interpretation 28 (4), 385-97.
- Munoz, Jose Esteban (2009) Cruising Utopia: The Then and There of Queer Futurity, New York University Press.
- Spiegel, Gabrielle M. (1999) The Past as Text: The Theory and Practice of Medieval Historiography, Johns Hopkins University Press.
- West, Mona (1999) "Reading the Bible as Queer Americans: Social Location and the Hebrew Scriptures." Theology & Sexuality 5 (10), 28-42.
- Wilson, Nancy L. (2013) Outing the Bible: Queer Folks, God, Jesus, and the Christian Scriptures, Life Journey Press.
- 安田真由子 (2018)「舞い戻る死者、不正の告発」『福音と世界』73 (4)、28 - 33
- (2019)「時間をクィアすること」『福音と世界』74 (1)、41-43

## “Touch across Time”: Applying Queer Temporality to the Biblical Studies

Mayuko Yasuda

Medievalist Carolyn Dinshaw argues that thinking about sexuality in the Middle Ages is rethinking not only the Middle Ages, but also of the relationships between the present and the past, between those who live in the here and now and those who live(ed) in a time and space other than the here and now, and of the self which tries to establish such a relationship. This is a queer way to rethink the relationships across time.

This paper will introduce the concept of "touch across time," proposed by Dinshaw, and review how it has influenced biblical studies in the United States.

**Keywords:** Queer temporality, Queer criticism, Biblical studies, Pauline studies